Ⅻ　花き類（非食用）

１．　き　く

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
11	アミスター２０フロアブル	散布	発病初期	5 回以内	
3	アンビルフロアブル	散布	発病初期	7 回以内	
M2	クムラス	散布	–	–	
3	サプロール乳剤	散布	発病初期	5 回以内	
31	スターナ水和剤	散布	–	5 回以内	
M3	ステンレス	散布	–	8 回以内	
11	ストロビーフロアブル	散布	発病初期	3 回以内	
M5	ダコニール１０００	散布	–	6 回以内	
3	チルト乳剤２５	散布	発病初期	3 回以内	
3	トリフミン乳剤	散布	–	5 回以内	
19	ポリオキシンＡＬ水溶剤	散布	発病初期	8 回以内	（黒斑病は花き類･観葉植物登録）
3	マネージ乳剤	散布	発病初期	6 回以内	
3	ラリー乳剤	散布	発病初期	5 回以内	

・殺菌剤（参考農薬）

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
11	ストロビーフロアブル	散布	発病初期	3 回以内	
M10	モレスタン水和剤	散布	発病初期	10 回以内	花き類･観葉植物（ｶｰﾈｰｼｮﾝを除く）

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	アドマイヤーフロアブル	散布	発生初期	5 回以内	（施設栽培）
1	オルトラン水和剤	散布	発生初期	5 回以内	花き類･観葉植物
–	オレート液剤	散布	発生初期～収穫前日まで	_	
1	オンコル粒剤１	植穴土壌混和	定植時	1 回	
21	サンマイトフロアブル	散布	–	2 回以内	
21	ハチハチ乳剤	散布	発生初期	4 回以内	
UN	プレオフロアブル	散布	発生初期	4 回以内	花き類･観葉植物
4	ベストガード水溶剤	散布	発生初期	4 回以内	
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	発生初期	5 回以内	花き類・観葉植物（ストック、りんどうを除く）

・殺虫剤（参考農薬）

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
3	アーデント水和剤	散布	発生初期	5 回以内	
3	アグロスリン乳剤	散布	発生初期	6 回以内	
6	アファーム乳剤	散布	発生初期	5 回以内	（オオタバコガは花き類･観葉植物登録）
11	エスマルクＤＦ	散布	発生初期	–	
1	オルトラン粒剤	株元散布	発生初期	5 回以内	
1	ガードホープ液剤	土壌灌注	生育期	2 回以内	
15	カスケード乳剤	散布	発生初期	3 回以内	
1	ガゼット粒剤	株元散布又は植穴土壌混和	定植時	3 回以内	
20	カネマイトフロアブル	散布	–	1 回	
13	コテツフロアブル	散布	発生初期	2 回以内	
3	スカウトフロアブル	散布	–	5 回以内	花き類･観葉植物（宿根かすみそう、ｸﾞﾗｼﾞｵﾗｽ、ﾄﾙｺｷﾞｷｮｳ、りんどうを除く）
5	スピノエース顆粒水和剤	散布	発生初期	2 回以内	
1	スミチオン乳剤	散布	–	6 回以内	
4	ダントツ粒剤	生育期株元散布	発生初期	4 回以内	

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
10	ニッソラン水和剤	散布	–	2 回以内	花き類･観葉植物
21	ピラニカＥＷ	散布	発生初期	1 回	
28	フェニックス顆粒水和剤	散布	発生初期	4 回以内	
4	ベストガード粒剤	生育期株元散布	発生初期	4 回以内	
4	モスピラン粒剤	株元散布	生育初期	1 回	
18	ロムダンフロアブル	散布	発生初期	5 回以内	

注1)　使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。
注2)　薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。
注3)　農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。
注4)　蚕毒・魚毒については、「28. 花き類の総括注意」も参照する。

病害虫名（Ｆ：菌類病、Ｂ：細菌病、Ｖ：ウイルス病、Ｏ：その他の病原体）

病害虫名	防除時期	防　除　方　法	注　意　事　項
わい化病 （ＣＳＶｄ） （Ｏ）	植　付　前	1. 無病苗を使用する。 2. ３年以上の連作を避ける。 3. 発病後は必ず品種を更新する。	1. 摘蕾や切り花作業時に､接触､刃物により汁液伝染する。
え そ 病 （ＴＳＷＶ） 茎えそ病 （ＣＳＮＶ） （Ｖ）	植　付　前	1. 無病苗を使用する。	1. いずれのウイルスもアザミウマ類により媒介される。 2. 両病害の病徴は類似しているが､ＴＳＷＶには簡易診断キットが市販されているので､それを用いて診断可能である。
	生 育 期 間	1. ウイルス感染苗による伝播は広範囲に及ぶため、育苗時の感染に厳重注意する。 2. アザミウマ類の飛来・増殖を徹底的に阻止する。ハウスの開口部を防虫ネット（0.4㎜目合い）で被覆すると侵入を軽減できる。また、アザミウマ類の項、又は「25. 花き類・観葉植物」の項を参考に、定期的に殺虫剤を散布する。 3. ハウス周辺の雑草は伝染源になるので除草する。 4. 罹病株から順次二次伝染が起こるので、発病株は早期に抜き取り埋却する。	
白さび病 （Ｆ）	育 苗 期 間	1. 発病葉は見つけ次第除去する。 2. サプロール乳剤 1,000 倍液を散布する。 3. ほ場衛生の向上に取り組む。	1. 育苗中の薬剤防除は予防に重点をおく。 2. 地下芽(うど芽)を用いる。
	ほ 場 期 間 （夏　ぎ　く ８月咲きぎく ９月咲きぎく 秋　ぎ　く）	1. 多発ほ場では、連作を避ける。 2. アンビルフロアブル、サプロール乳剤、トリフミン乳剤、マネージ乳剤の 1,000 倍液、アミスター２０フロアブル、ストロビーフロアブルの 2,000 倍液、ポリオキシンＡＬ水溶剤 2,500 倍液、チルト乳剤２５、ラリー乳剤の 3,000 倍液のいずれかを発生初期から２～３回 10 日おきに散布する。 3. クムラス 300 倍液を散布する。	1. 耐性菌の出現を避けるため、特にＤＭＩ剤（サプロール、トリフミン、ラリー、チルト２５、アンビルフロアブル、マネージ）の連用はしない。 2. チルトは野菜にかかると薬害を生じる恐れがあるので注意する。 3. ＱｏＩ剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。 4. マネージは黒さび病にも発病抑制効果がある。
黒さび病 （Ｆ）	育 苗 期 間	1. 発病葉は見つけ次第除去する。 2. ほ場衛生の向上に取り組む。	1. 育苗中の薬剤防除は予防に重点をおく。 2. 地下芽（うど芽）を用いる。

病害虫名	防除時期	防　除　方　法	注　意　事　項
黒さび病 （F）	ほ場期間 （夏ぎく ８月咲きぎく ９月咲きぎく 秋ぎく）	1. 多発ほ場では、連作を避ける。 2. ステンレス 2,000 倍液を散布する。 3. 罹病茎葉は早めに摘み取り、まん延を防止する。	
黒斑病 （F）	ほ場期間	1. 発病葉は見つけ次第除去する。 2. ほ場衛生の向上に取り組む。 3. ほ場内の風通しを良くする。 4. ダコニール１０００の 1,000 倍液、ポリオキシンＡＬ水溶剤 2,500 倍液のいずれかを散布する。 ［参考農薬］ 1. ストロビーフロアブル 2,000～3,000 倍液を散布する。	1. ＱｏＩ剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。
うどんこ病 （F）	育苗期間	1. 苗は無病株から採取する。	
	ほ場期間	1. 発病が見られたら通風を良くすることに努める。 2. 窒素過剰にならないようにする。 ［参考農薬］ 1. モレスタン水和剤 2,000～3,000 倍液を散布する。	
斑点細菌病 （B）	生育期間	1. 発病葉は見つけ次第除去する。 2. ほ場衛生の向上に取り組む。 3. ほ場内の風通しを良くする。 4. スターナ水和剤 1,000 倍液を散布する。	
アブラムシ類 （ウイルス媒介）	定植時	1. オンコル粒剤１を１株当り 0.25g 植穴土壌混和する。 ［参考農薬］ 1. ガゼット粒剤を１株当り２ｇ株元散布又は植穴土壌混和する（ただし、10ａ当り 18kg まで）。	1. 軟弱徒長苗、高温乾燥期は、薬害のおそれがあるので使用しない。
	生育期間	1. 挿芽は無病株から選ぶ。 2. オレート液剤 100 倍液、オルトラン水和剤、ハチハチ乳剤、ベストガード水溶剤の 1,000 倍液、アドマイヤーフロアブル 2,000 倍液、モスピラン顆粒水溶剤 4,000 倍液のいずれかを散布する。 ［参考農薬］ 1. モスピラン粒剤を１株当り 0.5～１ｇ、ダントツ粒剤を１株当り１g、ベストガード粒剤を１株当り１～２ｇ、オルトラン粒剤を 10a 当り３～６kg のいずれかを株元散布する。 2. アーデント水和剤 1,000 倍液、スミチオン乳剤 1,000～2,000 倍液、アグロスリン乳剤 2,000 倍液、スカウトフロアブル 2,000～3,000 倍液のいずれかを散布する。	1. オレートは昆虫の気門を塞いで窒息させ殺虫するので、虫体に直接かかるように５～７日間隔で２回散布する。 **2. ハチハチ、アーデント、アグロスリン、スカウトは蚕毒及び魚毒に、アドマイヤー、モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 3. アドマイヤーは施設栽培に限る。

病害虫名	防除時期	防　除　方　法	注　意　事　項
アザミウマ類	生　育　期　間	1. オルトラン水和剤 1,000 倍液を散布する。 ［参考農薬］ 1. オルトラン粒剤を 10a 当り３～６kg 株元散布する。 2. アファーム乳剤 1,000 倍液、又はスピノエース顆粒水和剤 5,000 倍液を散布する。	1. アザミウマ類は、着蕾期から防除を徹底する。 **2. スピノエースは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 3. アファームは蚕毒及び魚毒に注意する。
ミカンキイロアザミウマ	生　育　期　間	［参考農薬］ 1. アーデント水和剤 1,000 倍液、又はカスケード乳剤 2,000 倍液を散布する。	**1. アーデントは蚕毒及び魚毒に、カスケードは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。**
ハ　ダ　ニ　類	５月下旬～ ９月上旬	1. サンマイトフロアブル 1,000 倍液を散布する。 ［参考農薬］ 1. カネマイトフロアブル 1,000～1,500 倍液、ピラニカＥＷの 1,000～2,000 倍液、コテツフロアブル 2,000 倍液、ニッソラン水和剤 2,000～3,000 倍液のいずれかを散布する。	1. 乾燥期に多発する。 **2. サンマイト、ピラニカ、コテツは魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 3. サンマイト、コテツは蚕毒に注意する。
オオタバコガ	生　育　期　間	1. プレオフロアブル 1,000 倍液を散布する。 ［参考農薬］ 1. アファーム乳剤、エスマルクＤＦ、ロムダンフロアブルの 1,000 倍液、フェニックス顆粒水和剤 2,000 倍液、スピノエース顆粒水和剤 2,500～5,000 倍液のいずれかを散布する。	1. オオタバコガの平年の発生時期は５月下旬～10 月下旬で、きくでは６月上旬及び８月中旬以降に食害が認められる。この時期にフェロモントラップの成虫発生消長を参考にして、系統の異なる薬剤をローテーションしながら散布する。 **2. アファームは蚕毒及び魚毒に、プレオ、エスマルク、ロムダン、スピノエース、フェニックスは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。** 3. フェニックスは水産動物（甲殻類）に影響があるので注意する。
ハガレセンチュウ	植　付　前	1. 土壌消毒する。 2. 被害葉を摘葉する。 ［参考農薬］ 1. ガードホープ液剤 3,000 倍液を１㎡当り２ℓ土壌灌注する。	1. 頂芽繁殖を行う。 2. 降雨時に多い。 3. 連作を避ける。 4. ガードホープは薬液灌注後、１㎡当り 10～15ℓ灌水する。
ネコブセンチュウ ネグサレセンチュウ	植　付　前	1. 土壌線虫の項を参照する。	
コアオカスミカメ	５ 月 ～ ９ 月	1. 畦畔のヨモギなど雑草を刈り取る。	1. 畦畔のヨモギなどの雑草に寄生が多い。